



ホジキンリンパ腫で治療を受けた女性患者の出産率は一般集団と同程度

J Clin Oncol,10;36(26):2718-2725, 2018

近年では、若年女性のホジキンリンパ腫サバイバーにおける出産率には増加がみられており、現在では一般集団と同程度であるという報告が、「Journal of Clinical Oncology」9月10日号に掲載された。

ホジキンリンパ腫の治療に従来用いられてきた MOPP [mechlorethamine (メクロレタミン、国内未承認)、ビンクリスチン、プロカルバジン、プレドニゾロン] 療法は生殖器への毒性が強く、妊孕性に問題があったが、治療の進歩に伴って妊孕性への影響は減ってきている。また、現在用いられている治療レジメンのうち、ABVD (ドキシソルビシン、ブレオマイシン、ビンブラスチン、ダカルバジン) 療法に比べて BEACOPP (ブレオマイシン、エトポシド、ドキシソルビシン、シクロホスファミド、ビンクリスチン、プロカルバジン、プレドニゾロン) 療法の方が生殖器への毒性が強いことが報告されている。

女性のホジキンリンパ腫サバイバーの出産率が低いことは過去の研究で示されていたが、現行の治療下における出産率については検討されていなかった。そこで、カロリンスカ研究所 (スウェーデン) の Caroline E. Weibull 氏は今回、1992～2009年にホジキンリンパ腫と診断され、診断から9カ月の時点で寛解状態にあった18～40歳の女性449人と出生年で年齢をマッチさせた一般集団からの女性2,210人 (対照群) を対象に出産率を比較した。

その結果、追跡期間中に無再発だったホジキンリンパ腫の女性の22%が出産していた。1,000人年当たりの初産率は、ホジキンリンパ腫の診断年が1992～1997年の女性では40.2だったのに対し、2004～2009年の女性では69.7へと増加していた。この間、対照群における初産率は70.1で変化がなかった。また、診断年が2004～2009年だった女性における累積出産率は、対照群と同程度であった。

さらに、ホジキンリンパ腫の病期や治療法にかかわらず、診断から3年以降では、患者群と対照群で出産率に差はみられなかった。一方、BEACOPP療法を6～8コース受けた患者群では、診断から3年以内の出産率は対照群よりも低く (ハザード比0.23、95%信頼区間0.06～0.94)、6～8コースの化学療法と同時に放射線療法を受けた患者群でも出産率は低かった (ハザード比0.21、95%信頼区間0.07～0.65)。

以上の結果から、Weibull 氏は「女性のホジキンリンパ腫サバイバーの出産率には改善がみられ、無再発で診断から3年以上が経過した女性患者と一般集団の女性には出産率に差はみられないことが分かった」と結論づけている。また、同氏は、ホジキンリンパ腫の女性患者で出産率が増加したのは、治療法の毒性が減少したことだけでなく、疾患に対する理解やカウンセリング内容の変化も影響している可能性を指摘しつつ、「患者には治療後の妊娠は安全で出産できる可能性が高いことをきちんと伝え、心配させないようにする必要がある」と付け加えている。

- (1) メディカルカスタムコンテンツは、AJ Advisers LLCが制作、株式会社プロウエーブが編集 (編集協力 AJ Advisers LLC) した記事です。情報の正確性については万全を期しておりますが、各制作・編集社は、利用者が本記事の情報をを用いて行う一切の行為について何ら責任を負うものではありません。
- (2) 本記事の内容及びメディカルカスタムコンテンツのロゴの無断転載・配布を禁じます。
- (3) 掲載されている薬剤の使用にあたっては添付文書をご参照ください。